

N I E(新聞を教育へ)を活用し、主体的に学ぶ力を

— 2つのアンケート調査から考える —

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：最近、毎月のようにアンケート調査をしているようですね。

A：(1)はい。本年6月には、選挙権年齢が20歳以上から18歳以上に引き上げられることをテーマに、1393名のアンケート調査をいたしました。

(2)7月下旬には、神奈川県相模原市の知的障害者施設での19人刺殺事件について、1287名のアンケート調査をいたしました。

(3)どちらも塾生が対象で、回収率は6月の調査は49%、7月の調査は関心が高かったせいか、60.4%でした。

Q：どのような内容のアンケート調査でしたか。

A：(1)6月の調査では、18歳になり選挙権を得たら投票に行きますか(74.6%が行く)、選挙に関心がありますか(36.6%がある)などで、投票に行く理由などもお聞きしました。

(2)7月の調査では、「この事件についての新聞等の報道に接し、考えたことを自由にお書きください」という問いへの自由記載でした。

(3)19名もの方々が亡くなったので、なぜそのような事件が起きたのか、どうしたら防げるのか、新聞で読んだことを思い返して、できるだけ具体的に書こうという指導が開倫塾の各教室で行われたせいか、かなり長文の記載が多かったようです。

Q：なぜ開倫塾ではこのようなアンケート調査を行っているのですか。

A：(1)開倫塾では、1979年の創業以来、授業の中に新聞を取り入れた指導を行ってきたからです。

(2)新聞などジャーナリストは、社会の番犬(watch dog)。社会が取り組むべき課題はここにあるよと、ワンワンと大きな声で教えてくださる役割をもつものです。市民は、新聞を毎日読み、社会の出来事や課題を知り、自らの責任で行動することが大事と考えます。

(3)新聞を読んで身に着く能力は、自分で考える力、批判的思考(クリティカル・シンキング)能力と考えます。

(4)このような理由で、開倫塾ではNIE(Newspaper In Education 新聞を教育へ)の活動を創業以来継続。10月15日からの新聞週間や、11月のNIE月間には、毎年、地元の新聞記者の方々をお招きして、「新聞ができるまで。新聞を読んで考えよう」というテーマでの講演会を開催しています。

(5)大きな事件、事故や出来事があったときには、アンケート調査を実施し、その結果を各校舎やマスコミ各社などに御報告させて頂いております。

Q：子どもたちが新聞を読むと、「自分で考える力」や「批判的思考能力」以外に、「学力」も身に着きますか。

A：(1)私は、「学力とは主体的に学ぶ力」であると考えます。新聞を毎日じっくりと読み込むことは、社会への興味・関心を広げ、深めます。社会の課題を自らの力で発見し、その課題の解決のために自分でなすべきことを考えるよいきっかけにもなります。何のために学ぶのか、社会に出て何をなすべきか、どのような人生を送ったらよいのかななどを、自分の力で考えるよいきっかけになるのが、新聞と、本格的な読書です。私は、新聞を読むことと、本格的な読書とで、「主体的に学ぶ力」という意味での学力が身に着くと確信します。

(2)新聞の記事は「5W1H」の論理的な構成で書かれていますので、論理的な思考能力に慣れ親しむことができます。

(3)新聞を読むことに加えて、「スクラップブック」づくりや、新聞記事やコラム、社説などの「書き写し」、テーマ(題)付けなどを少しずつでも行うことは、「論理的な文章を書く」能力を身に着けることにも役立ちます。

(4)これに加えて、新聞記事について話し合う機会を家庭や学校、学習塾などで増やせば増やすほど、「論理的に話す」能力も身に着けることができます。

(5)今後、学習指導要領が大幅に改訂され、小学生からプログラミング教育がスタートします。プログラミング教育の前提となる能力とは、論理的な思考能力と、論理的な文章を分析的に読む能力です。小学生から新聞を読むことは、小学生からのプログラミング教育にも役立ちます。

(6)逆に言えば、プログラミング教育では、新聞などを活用して論理的な思考能力を身に着けたり、論理的な文章を分析的に読む能力を身に着ける取り組みも、同時並行的に行うべきと考えます。

Q：新聞は受験にも役立つのですか。

A：(1)もちろんです。中学入試、高校入試、大学入試、大学院入試など入学試験では、論理的に書かれた大量の文章をごく短時間で正確に読み込み、正解を出し続けなければ合格点を取ることができません。

(2)新聞を読み、大量の文章(問題文、設問、選択肢など)を短時間で正確に読み込む能力を身につける訓練を行うことは、絶大な効果を発揮します。

(3)論文試験や面接試験の内容を深めるのにも役立ちます。

(4)新聞が一番役立つのは、社会に出て仕事や社会的活動をするとき、充実した人生を目指すときです。

(5)どんどん変わり続ける世の中の動きを知り、その動きを自分の力で読み、自分の力で考え続けられない限り、企業もNPOも行政も成り立ちません。充実した人生を送ることもできません。そのときに一番有用なのが新聞だからです。

Q：学習塾、予備校、私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことはありますか。

A：(1)新聞を購読していない御家庭が多いと聞きます。こんな時こそ、自分の教え子である小学生・中学生・高校生・大学生には、新聞を毎日読むように声を大きくして指導してください。

(2)家庭で新聞をとっていなければどうするか。金銭的に新聞が購読できない家庭ばかりではな

いでしょうから、保護者会では、子どもの教育のために御家庭で新聞を購読するように保護者
にお願いをすることが第一。保護者の皆様も子どもと一緒に新聞を読み、世の中のことを子
もたちと語り合うことをお願いしてください。

- (3) 学校や地域の図書館に、できれば毎日、少なくとも週に何回かは行き、新聞を読むように御
指導ください。
- (4) 各教科の授業の中で新聞を活用した指導も行うことに、学習塾や予備校、学校をあげて取り
組んでください。
- (5) 「スクラップブック」づくりを奨励する。「スクラップブックコンテスト」や新聞を活用し
た「エッセイコンテスト」、「アンケート調査」などを積極的に行うこと。よくできたものは、
新聞社などにも送ること。
- (6) 地域の新聞記者の皆様をお招きして、「新聞記事ができるまで。新聞を読んで考えよう」な
どのテーマで講演会を開催すること。
- (7) これらの取り組みを通して、PISA 型の学力や新学習指導要領を先取りする取り組みが可能
と考えます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、お読みになればお役に立つ本を何冊か御紹介いたします。

- (1) 本年、2016 年は、スペインの文豪、セルバンテスの没後 400 年です。そこで、セルバンテ
スの代表作「ドン・キホーテ」を岩波文庫全 6 巻などでお読みになることをお勧めいたしま
す。ドン・キホーテが、遍歴の騎士の精神であると考えたところに、横線を引きながら読み通
せば、ヨーロッパの人々が目指す「ノブレス・オブリージュ(高貴なる精神)」とは何かがよく
わかります。エリート教育に関心がある先生にとっての必読書が、セルバンテス作の「ドン・
キホーテ」です。
- (2) 安倍首相は相当がんばっていますが、世界的に広まり始めたデフレはまだまだ続きそうです。
長谷川慶太郎氏の最新著「世界大激変、次なる経済基調が定まった!」東洋経済新報社 2016 年 8
月 11 日刊で、デフレの本質とは何かを是非学んでください。
- (3) デフレを生き抜くのに必要なのは「イノベーション」です。イノベーションといえば、シュ
ンペーターです。ヨーゼフ・シュンペーター著、大野一訳「資本主義、社会主義、民主主義 I、
II」日経 PB クラシックス、日経 PB 社 2016 年 7 月 19 日刊は、イノベーションの基本書。イ
ノベーションを目指す方は、シュンペーター著「経済発展の理論(上)(下)」岩波文庫とともに、
是非併読を。
- (4) ではどのようにイノベーションを進めたらよいかは、イオン特別顧問の山梨広一先生の最新
著「いい努力ーマッキンゼーで 25 年にわたって膨大な仕事をしてわかったー」ダイヤモンド
社 2016 年 7 月 22 日刊と、同著のベストセラー「シンプルな戦略、戦い方のレベルを上げる
実跡アプローチ、その戦略は一言で言えるか」東洋経済新報社 2014 年 3 月 27 日刊で学習を。
- (5) 小山英樹、峯下隆志、鈴木建生著「この一冊でわかる! アクティブラーニング」PHP2016
年 7 月 7 日刊はアクティブラーニングの必読書。
- (6) 哲学なくして教育活動なし。哲学に御関心のある先生には、松永澄夫先生の最新著「感情と
意味世界」東信堂 2016 年 7 月 17 日刊をお勧めします。同著「経験のエレメント」東信堂 2015

年 10 月 31 日刊と同著「価値・意味・秩序—もう一つの哲学概論、哲学が考えるべきこと—」
東信堂 2014 年 4 月 25 日刊の併読もお勧めします。是非、お読みください。

お知らせ

毎年 11 月第 3 木曜日は「ユネスコ世界哲学の日」です。開倫ユネスコ協会では、スプリング
ユネスコクラブ・伊豆ユネスコクラブと共催で、「ユネスコ世界哲学の日」イベント、「哲学な
くしてユネスコなし。今、哲学しよう」を 2016 年 11 月 17 日(木)10:00 ~ 13:00 まで東京青山
の国連大学国際会議場において開催いたします。是非、御参加ください。

— 2016 年 8 月 4 日(木)記—